



## 検診で乳房タイプ確認を



乳腺クリニックで撮影したマンモグラフィの画像を見る風間さん。全体が真っ白でがんは見えなかった

「検診で見つからなかったのは、そういうことか」  
2015年7月、都内で開かれた乳がん検診のセミナー。乳がん患者仲間と参加した川崎市の会社員風間沙織さん(55)は、米国人ナインシー・カペロさんの講演を聞いて納得した。

風間さんは、乳がんとわかった時を振り返った。  
14年2月、お風呂上がり  
に左胸のしこりに気づいた。信じられなかった。10年以上前から毎年、マンモ検診を受け、「異常なし」  
だったからだ。

脂肪は黒く写る。ナンシーさんは、乳腺の割合が高く、脂肪が低い「高濃度乳房」というタイプのため、乳房全体が白く写り、同じ色合いのがんが見えなかったという。  
風間さんは、乳がんとうわかった時を振り返った。  
14年2月、お風呂上がり  
に左胸のしこりに気づいた。信じられなかった。10年以上前から毎年、マンモ検診を受け、「異常なし」  
だったからだ。

すぐに乳腺クリニックで検査を受けた。しこりはマンモの画像ではわからず、超音波(エコー)画像では黒い影となって写った。  
厚生労働省研究班は、40歳以上の日本人女性の約4割が高濃度乳房と推測する。高濃度乳房は、マンモではがんを見つげにくい  
が、超音波検査では見つけやすい。ただ、超音波検査は乳がん死亡率を減らす効果がまだ不明のため、国が勧める検診項目には入っていない。現在推奨されているのは、40歳以上の女性を対象にした、2年に1回のマンモ検診のみだ。  
問題は、高濃度乳房と知らされぬまま、マンモ検診を受け続けるケースだ。  
ナンシーさんは亡くなる18年まで、検診結果で、高濃度乳房など乳房のタイプの通知を求める運動を展開した。今春、米食品医薬品局(FDA)は検査施設に対し、通知の義務づけを決めた。  
日本では、厚生労働省検討会で通知を巡り、課題を整理するなど議論が続く。各市町村や職場ごとに通知への対応は分かれる。高濃度乳房の女性に通知し、代替手段として超音波検診を案内するケースもあれば、通知しないケースもある。

「受けない医療 2020年版」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています。